た優しい言葉をかけるのを、避けよう避けようとなさるんですわ。さうして、わたしがすつかり墮落してしまつたら、あなたはきつとわたしを責めて、わたしの墮落をお喜びなさるに違ひありませんわ。」

「待つてくれ、待つてくれ。」と夫は嚴しい冷やかな調子で言ひました。「お前がいま言つたのはよくない事だよ。それはたゞお前がわたしに對して、よからぬ心持を抱いてゐるのを證明するばかりだ。お前は……」

「わたしがあなたを愛してゐないと仰しやるんですの？　言つて頂戴！　言つて頂戴！」とわたしは夫の言葉を引き取りました。眼からは涙がはふり落ち、わたしはベンチに腰をおろして、ハンカチで顏を隱しました。『まあ、この人はわたしの事をこんな風に考へてるのだ！』喟嘆もとへ込み上げて來る嗚咽をやつとのことで怺へながら、わたしは心に考へました。『もうおしまひだ。昔のわたし達の戀もこれでおしまひだ。』何かある心内の聲がかう囁きました。夫はわたしの傍へ寄つて、慰めようともしません。わたしの言つた事に憮然としてゐるのです。その聲は落ちつき拂つて、乾き切つてゐました。

「お前はわたしのどういふ所を責めるのか、一向合點が行かないね。」と夫は口を切りました。

「もしわたしが以前のやうにお前を愛しなかつたといふ事なら……」

「愛しなかつたですつて！」とわたしはハンカチに顏を埋めたまゝ言ひました。苦い涙は一層しげく流れ出て、ハンカチを濡らしました。

「もしさういふことなら、それは時とわれ〳〵自身の罪なんだ。人間の一生にはその時代々々に相當した愛があるのだ……」夫はちよつと口を噤みました。「お前がそんなに打ち明けた態度を望むのなら、いつそすつかり本當の事を言つてしまはうね？　わたしが初めてお前を知つた年には、お前のことばかり考へながら、夜もろく〳〵寢ないで、自分で自分の戀を造り上げてゐた。そしてこの戀がわたしの心の中で、だん〳〵成長して行つたものだ。ところが丁度それと同じやうに、ペテルブルグでも外國でも、わたしは毎晩寢ないで恐ろしい夜を過ごした。そして自分を苦しめるこの戀を叩き毀して、すつかり失くしてしまはうとさへ思つたものだ。けれど、それを叩き毀すことは出來ないで、たゞわたしを苦しめてゐるものを破壞したに過ぎない。それでわたしはやつと落ちついたのだが、しかし、それでもやはり愛してゐる、たゞ愛し方がちがふのだ。」

「まあ、あなたはこれを愛だと仰しやるんですの？　いゝえ、これはたゞ苦しみですわ。」とわたしは言ひました。「何故あなたはわたしに社交界で暮すことをお許しなさつたんですの？

だつて、あなたはあゝいふ暮しを大變わるいものと思つて、つまりそのために、わたしを愛さなくなつておしまひなすつたのぢやありませんか。」

「社交界のことぢやないよ、マーシャ。」と夫は言ひました。

「何故あなたは御自分の權力を行使なさらなかつたんですの？」わたしは言葉を續けました。「何故わたしをお縛りなさらなかつたの、何故わたしをお殺しにならなかつたんですの？　以前自分の幸福であつたものをすつかり失くしてしまふよか、その方がずつと樂だつたでせうよ。その方が恥かしい思ひをしないだけでも、まだよかつたでせうにね。」

わたしはまた慟哭しながら顏を蔽ひました。

このとき濡れ鼠になつたカーチャとソーニャが、さも樂しさうに大きな聲で、お喋りをしたり笑つたりしながら、露臺へはいつて來ました。けれどわたし達を見ると急に聲をひそめて、すぐ出て行つてしまひました。

二人が出て行つた時、わたしは長いこと默つてゐました。わたしはありたけの涙を出してしまふと、胸が輕くなつて來ました。わたしは夫を見上げました。夫は肱突きをしてその上に頭を載せたまゝ、じつと坐つてゐました。そしてわたしの視線に何か答へようとしましたが、たゞ重苦

しい吐息を一つついたきりで、またもや肱突きをするのでした。

わたしは傍へ寄つてその手を押し退けました。夫の視線はもの思はしげにわたしの方へ向きました。

「さうだ、」さながら自分の思想の絲を手繰り續けるやうに、夫はやがて言ひ出しました。

「我々は誰でも——殊に女はなほさらだ——人生の馬鹿々々しさを自分ですつかり經驗しなくちゃ、本當の生活に立ち返ることが出來ないのだ。人のいふ事など信じる譯に行かんからね。お前はあの時まだ充分にあの美しく、愛らしい、馬鹿げた生活を、經驗し盡してゐなかつたのだ。だからわたしは、あゝした生活に醉ひ切つてゐるお前の姿に見惚れながら、そのまゝ最後まで打つちやつて置くことにしたのだ。わたしはお前を束縛する權利がないやうな氣がしたのだ。もつともわたしにとつては、さういふ時代はもう疾つくに過ぎ去つてゐたんだけれどね。」

「もしあなたがわたしを愛して下さるなら、なぜわたしと一緒にあんな馬鹿げたことを經驗なすつたんですの？　何故わたしにあんな眞似をさせてお置きになつたんですの？」

「それはほかでもない、あの時お前はわたしのいふ事を信じたいと思つても、信じることが出來なかつたからだよ。お前は自分でそれを悟らなくちやならなかつたのだ、そして實際その悟り

を得た譯なんだ。」

「あなたは、理窟ばかり並べてらしたんですわ、やたらに理窟ばかり並べてらしたんですわ。」とわたしは言ひました。「そして愛情の方がお留守になつたんですわ。」

わたし達は再び暫く無言でゐました。

「お前が今いつた事は殘酷だが、しかしそれは本當だ。」夫は急に立ち上つて、露臺の上を歩き廻りながら言ひました。「さうだ、それは本當だ。わたしが悪かつたのだ。」やがてわたしの前に立ちどまつて、更に言ひ足しました。「わたしは全然お前を愛することを諦めるか、それともつと單純な愛し方をするか、どつちかでなくちやならなかつたのだ、さうだ。」

「何もかもすつかり忘れてしまひませうよ。」

とわたしはおづ〳〵言ひ出しました。

「いや、過ぎ去つたことはもう返らない、もう二度と返す譯に行かない。」かう言つた夫の聲は何となく柔いで來ました。

「もうすつかり返つて來ましたわ。」夫の肩に手を載せながら、わたしはこんな風に言ひました。

夫はわたしの手を取つて、じつと握り締めました。

「いや、わたしは昔が戀しくないと言つたが、あれは嘘だ。わたしは戀しい。今はもう失くなつてしまつた昔の愛——もう二度と返すことの出來ない昔の愛を思つて、わたしは泣いてゐるのだ。一體これは誰の罪なのか、わたしは知らない。今でも愛は殘つてゐるが、しかしそれはまるで違つた愛だ。愛の場所は殘つてゐるが、しかし愛そのものはすつかり病み衰へてしまつて、もう力も水氣もない。殘つたものはたゞ追憶と感謝だけだ。だが……」

「どうかそんな風にいはないで頂戴……」とわたしは遮りました。「またすつかり元の通りにしませうよ。だつてそれは出來るでせう？　ね？」夫の眼を覗き込みながら、わたしは訊きました。けれどその眼は澄み切つて落ちついてゐ、わたしの眼に深く見入つてゐませんでした。

わたしはさう言ひながらも、自分の望んでゐること訊ねてゐることが、到底出來ない相談であることを感じました。夫は落ちついた、つゝましい、老人めいた（とわたしには思はれました）微笑を浮べました。

「お前はまだ本當に若いね、ところが、わたしはもうこんな年寄りなんだよ。」と夫は言ひました。「わたしはもうお前の求めてゐるものを持ち合はさないんだよ。もう今さら自分を欺いて

みても仕方がないからね。」やはり同じやうな微笑を浮べたまゝかう言ひ足しました。

「もう二度と同じ生活を繰り返さないやうに努力しようぢやないか。」と夫は語り續けました。

「自分で自分に嘘をつくのはやめようぢやないか、昔の不安や動揺がなくなつたのを、有難いと思はなくちやならない！　わたし達はもう何も求めたり、興奮したりすることはないんだよ、わたし達はもう發見したのだ。わたし達はもうかなり充分幸福を授かつたのだ。だから今度はもうわきの方へ除けて、かういふ連中に道を讓らなくちやならないんだよ。」丁度この時ワーニャを抱いて來て、露臺の入口に立ちどまつた乳母を指さしながら、夫は言ひました。「さうぢやないか、マーシャ。」わたしの頭を引き寄せて接吻しながら、かう言葉を結びました。それは戀人ではなくて、古い親友の接吻でした。

庭からは次第に強く次第に甘く、香んばしい夜の涼氣が立ち昇つて來ました。物の響きと靜寂とは次第に莊嚴になつて、空には星が次第に繁く輝き始めました。わたしはじつと夫を瞻めてゐるうちに、遽に胸の中が輕くなつて來ました。それは丁度、わたしを惱ましてゐた病める心の神經が拔き取られたやうな鹽梅でした。わたしは忽然はつきりと靜かに悟りました――あの時分の心持は時そのものと同じやうに、二度と返らぬ過去のものとなつてしまつて、今それを引き戻すことは不可能なばかりでなく、却つて苦しい窮屈なことに相違ありません。それにもう愚痴は澤山だ。わたしの眼にこの上なく幸福らしく見えるあの頃は、本當にそれほど美しい時代だつたのだらうか？　それにまたあの時分のことが、何といふ遠い遠い昔のやうに思はれることだらう！

「だが、もうお茶の時刻だ！」と夫は言ひました。で、わたし達は一緒に客間へ出かけました。戸口の所で、わたしはまたワーニャをつれた乳母に出會ひました。わたしは赤ん坊を兩手に受け取り、むき出しになつた赤い小つちやな足をくるみながら、蕚と胸に締め寄せ、輕く脣を觸れて接吻しました。赤ん坊はさながら夢心地のやうに、皺だらけの指を擴げた小さな手を動かして、何か捜すか、それとも思ひ出さうとでもするやうに、どんよりした眼を見開きました。と、不意にこの眼がわたしの上にとまつて、思想の火花みたいなものがその中に閃きました。ふつくらと反り返つた脣がつぼまつたかと思ふと、急に開いて微笑となりました。『わたしのものだ、わたしのものだ、わたしのものだ！』とわたしは考へました。そして幸福な緊張を四肢に感じながら、赤ん坊を胸へ締めつけました。わたしは子供が痛い思ひをしないやうに、やつとのことで自分で自分を制したくらゐでした。かうしてその冷たい小さな足や、腹や、手や、やつと毛の生え揃つた頭などを接吻し始めました。夫が傍へ寄つて來ました。わたしは大急ぎで赤ん坊の顏を隱し、

すぐまた出して見せました。

「イワン・セルゲーイッチ！」（ワーニャの正式な呼び方）赤ん坊の頤を輕く指で觸りながら、夫はかう言ひました。けれどわたしはまた大急ぎで、イワン・セルゲーイッチを隱しました。わたしよりほかどんな人でも、この子を長く見る譯には行かないのです。わたしが夫を見上げると、その眼はわたしの眼を瞶めながら笑つてゐました。するとわたしは久し振りに初めて、輕々とした喜ばしい氣持でその眼を見ることが出來ました。

この日からわたしと夫のローマンスは終りを告げました。昔の感情は二度とかへらぬ貴い思ひ出となつて、子供らとその父親に對する新しい感情が、ほかの幸福な――すつかりちがつた意味で幸福な生活の基となりました。その生活をわたしは今この瞬間、まだ味はひ盡してゐないのです……。

納本

昭和三年八月十二日　第一刷發行
昭和二十五年五月三十日　第十六刷發行

結婚の幸福
定價六拾圓

譯者　米川正夫
發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎
印刷者　東京都板橋區板橋十丁目二四八四番地　白井知一

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

永井製本・三陽社印刷

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に致虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の靈に和して之を推敲するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫重版書

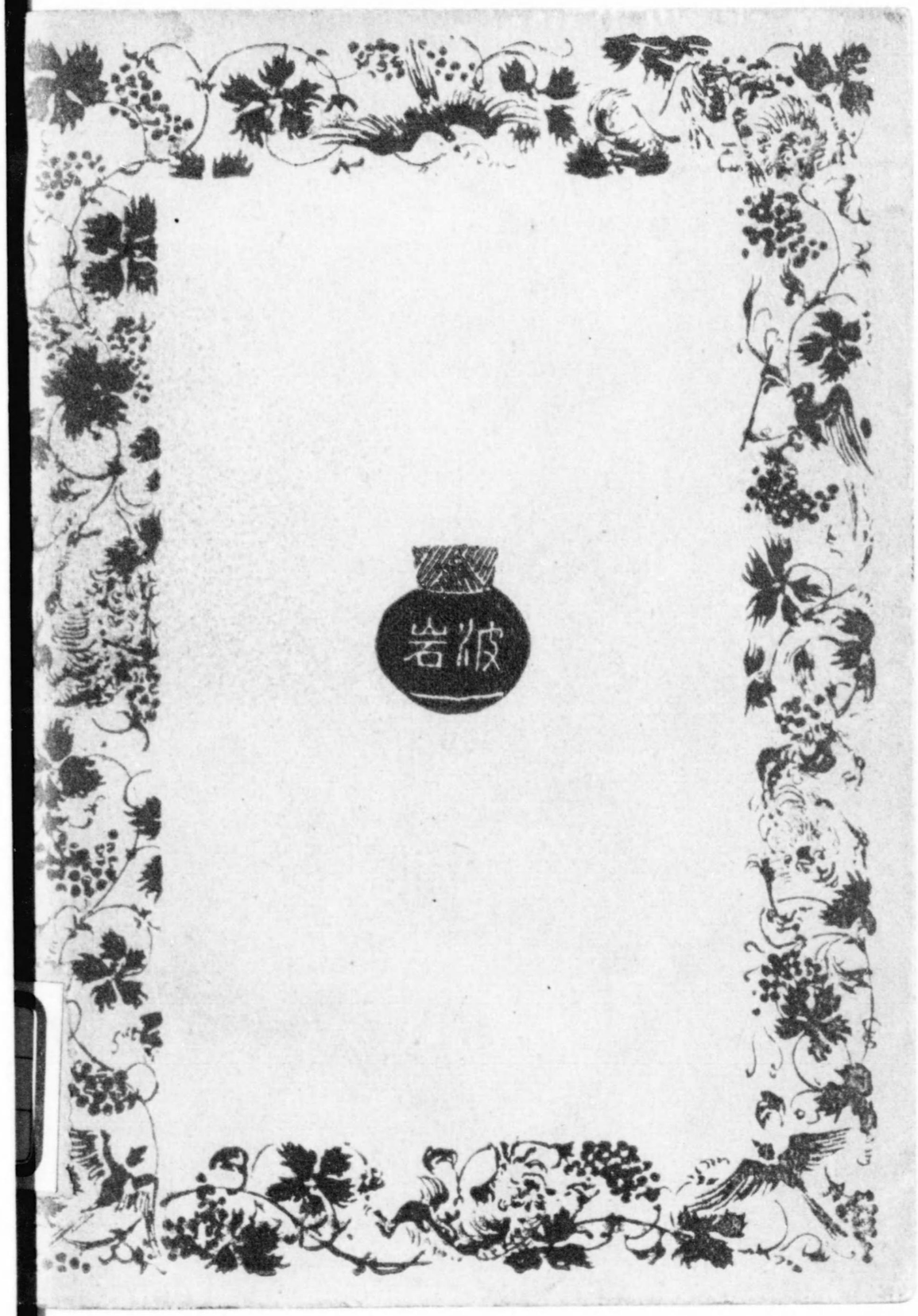
◇既刊一六四〇册

萬暦赤繪　志賀直哉作　120
小僧の神樣他十篇　志賀直哉作　60
牛肉と馬鈴薯他三篇　國木田獨歩作　30
啄木歌集　石川啄木著　50
田舍教師　田山花袋著　60
河童　芥川龍之介著　30
若山牧水歌集　若山喜志子選　50
赤彦歌集　齋藤茂吉選　久保田不二子選　60
青年　森鷗外作　60
文明論之概略　福澤諭吉著　60
ギリシア抒情詩選　呉茂一譯　30
人さまざま　テオフラストス著　吉田正通譯　30
デカメロン(一)　ボッカチオ作　野上素一譯　60
クリスマス・カロル　ディッケンス作　森田草平譯　60
怪談　ラフカディオ・ハルン　平井呈一譯　60
人と超人　ショオ作　市川又彦譯　100
緋文字　ホーソン作　佐藤清譯　50

ハックルベリイ・フィンの冒險(上)(下)　マークトウエーン　中村爲治譯　60
四人の少女　第一部上下　オールコット作　蹄岳しづ譯　各60
ファウスト　第一部　第二部　ゲーテ作　森林太郎譯　120
ハイルブロンの少女ケートヒェン　クライスト作　手塚富雄譯　60
旅の日のモーツァルト　リヤ作　石川錬次譯　30
感情教育(上)(中)(下)　フロベール作　生島遼一譯　各60
未來のイヴ(上)(下)　リラダン作　渡邊一夫譯　60
陽氣なクルクラン　ドーデー作　小川豪一譯　60
月曜物語　ドーデー著　佐藤譯　90
ベラミ(上)(下)　モーパッサン作　杉捷夫譯　90
スペードの女王他一篇　プーシキン作　神西清譯　30
トルストイ日記抄　トルストイ著　除村吉太郎譯　60
藝術とはどういふものか　トルストイ著　河野與一譯　50
ランケ世界史概觀　ランケ著　鈴木成高　相原信作譯　90

學問のすゝめ　福澤諭吉著　60
福翁自傳　福澤諭吉著　120
省察　デカルト著　三木清譯　60
教養と無秩序　マシュー・アーノルド著　多田英次譯　90
宗教論　シュライエルマッヘル著　佐野勝也　石井次郎譯　90
言語活動と生活　ファラデー力と物質　シャルル・バイイ著　小林英夫譯　90
權利のための鬪爭　イエーリンク著　日沖憲郎譯　30
近代民主政治(一)(二)(三)(四)　ブライス著　松山武譯　各90
君主論　マキアヴェルリ著　黑田正利譯　60
犯罪と刑罰　ベッカリーア著　風早八十二譯　60
デモクラシーの本質と價値　ハンス・ケルゼン著　西島芳二譯　60
經濟學及課稅之原理　リカアドオ著　小泉信三譯　120

最新刊書

愚管抄	丸山二郎校註	120
新春	徳富健次郎著	60
紅樓夢 (八)(九)	曹雪芹作 松枝茂夫譯 各	60
死刑囚最後の日	ユーゴー作 豐島與志雄譯	60
ミシェル・オークレール	ヴィルドラック作 内藤濯譯	50
ゴロヴィリョフ家の人々 上 下	シチェードリン作 湯淺芳子譯 各	90
オランダ獨立史 上卷 下卷	シラー著 丸山武夫譯	110 90
ローマ史論 第三卷	マキアヴェリ著 大岩誠譯	90
フレーベル自傳	長田新譯	60
善の研究	西田幾多郎著	60
甲陽軍鑑 (一)	古川哲史校訂	60
エンゲルスのカウツキーへの手紙	岡崎次郎譯	120
資本論 (三) カール・マルクス	エンゲルス編 向坂逸郎譯	120
漆山本春雨物語	上田秋成著 漆山又四郎校訂	30
或る女 前篇	有島武郎作	60
卍 (まんじ)	谷崎潤一郎作	60
彼女と彼	ジョルジュ・サンド 川崎竹一譯	90
農民 (下)	バルザック作 水野亮譯	90
感情教育 下	フロベール作 生島遼一譯	60
にんじん	ルナール作 岸田國士譯	100
青い花	ノヴァーリス作 小牧健夫譯	60
七つの傳說	ケラー作 堀内明譯	60
デカブリストの妻	ネクラーソフ作 谷耕平譯	60
三人姉妹	チェーホフ作 湯淺芳子譯	30
形而上學敍說	ライプニッツ著 河野與一譯	120
どちりなきりしたん	海老澤有道校註	30
經濟學における諸定義	マルサス著 玉野井芳郎譯	60
第三階級とは何か	シエイエス著 大岩誠譯	60

終